

(別紙様式3)

令和5年度あいちラーニング推進事業研究報告書

学校番号

43

学 校 名

愛知県立江南高等学校

校長氏名

福島 宏

研究責任者職・氏名		教諭・近藤 哲也	事務担当者職・氏名	主任・加藤 誉也
研究 テーマ	I C Tを活用した主体的・対話的で深い学びの推進			
本年度の 研究目標	(1) 変化の激しい時代を生き抜く力を育むために、各教科で生徒に身に付けさせたい力を着実に育む。 (2) I C T活用の特性・強味を生かすことにより、主体的・対話的で深い学びを推進する。 (3) 学び合いを通して、「協働的な学び」と「個別最適な学び」を一体的に充実させる。			
研 究 の 実 施 内 容				
実施月日	内 容			備 考 (対象生徒等)
4月 1日 4月 20日	授業研究推進委員会発足 第1回授業研究推進委員会 ・あいちラーニング推進事業の概要説明			該当教員
5月 18日	第2回授業研究推進委員会 ・今年度の研究計画について・公開授業発表者の決定について			該当教員
5月 23日	指導助言者と本事業に係る打ち合わせ (日本福祉大学国際福祉開発学部 米津明彦 教授) ・あいちラーニング推進事業の概要説明等について			校長・教頭
6月 1日	第3回授業研究推進委員会 ・公開授業日について ・プロジェクターの教室設置について			該当教員
6月 15日	第4回授業研究推進委員会 ・7月 11日の指導助言者による授業参観について			該当教員
7月 11日	指導助言者による授業参観（公民・数学・理科・保健・英語） 及び指導・助言 指導・助言者 日本福祉大学国際福祉開発学部 米津明彦 教授			2年3組 (公共：川村) 1年8組 (数A：浦上) 2年4組 (化基：由利) 2年2組 (保健：田内) 2年6組 (英コミュ：出口)
7月 12日	第1回連絡協議会 ・主管校研究計画 ・重点校研究計画 ・情報交換			校長・教頭・近藤
9月 7日	第5回授業研究推進委員会			該当職員

9月14日	・公開授業日程（案） 第6回授業研究推進委員会	該当教員
9月28日	・公開授業日程（案） 第7回授業研究推進委員会	該当教員
10月19日	・公開授業日程（案） 第8回授業研究推進委員会	
10月24日	・公開授業について ・生成AIの利用について 公開授業（国・公民・数・理・保体・英・家）および研究協議会 指導・助言者 日本福祉大学国際福祉開発学部 米津 明彦 教授 愛知県教育委員会高等学校教育課 渡辺 純 指導主事 愛知県総合教育センター研究部教科研究室 三浦千加子 研究指導主事 愛知県総合教育センター研究部教科研究室 渡邊 芳隆 研究指導主事 愛知県総合教育センター研修部企画研修室 久保 優一 研究指導主事 愛知県総合教育センター研修部基本研修室 服部 浩子 研究指導主事 愛知県立小牧南高等学校 早川 智代 教頭	2年7組 （論国：草野） 2年2組 （公共：川村） 1年8組 （数A：浦上） 2年6組 （化基：由利） 2年2組 （保健：田内） 2年1組 （英コミュ：出口） 1年5組 （家基：佐藤）
10～11月	先進校視察及び各種研修会の参加（計4校） 【津島高校、豊田北高校、西尾高校、愛知教育大学附属高校校】	該当教員
10月25日	重点校視察【小牧工科高校】（数学Ⅰ・言語文化）	教頭
11月1日	重点校視察【尾北高校】（現代文B・歴史総合・数学Ⅱ,Ⅲ）	該当教員
11月2日	第9回授業研究推進委員会 ・生成AIの利用について	該当職員
11月14日	・先進校視察及び各種研修会の参加後の他教科への情報共有について 重点校視察【岩倉総合高校】（英語コミュニケーションⅠ・生物基礎・総合探究）	該当職員
11月15日	重点校視察【犬山高校】（生物・論理表現Ⅰ）	該当教員
11月16日	第10回授業研究推進委員会 ・生成AIの利用について	該当教員
11月17日	重点校視察【古知野高校】（文学国語・歴史総合）	校長
11月29日	主管校12校合同研究成果発表（県総合教育センター）	教頭・近藤
12月8日	第2回連絡協議会 ・主管校からの報告 ・重点校からの報告 ・情報交換	校長・教頭・近藤
1月11日	第11回授業研究推進委員会 ・生成AIの利用について	該当職員
1月25日	第12回授業研究推進委員会 ・生成AIの利用について・ICT活用と主体的・対話的で深い学びの授業を今後広げていくための方策について	該当教員
2月8日	第13回授業研究推進委員会 ・生成AIの利用について・ICT活用と主体的・対話的で深い学びの授業を今後広げていくための方策について	該当職員
3月14日 3月下旬	第14回授業研究推進委員会 ・本年度の取組報告 ・取組に対する評価学校Webページに研究成果を掲載	該当教員 主管校・重点校



2 連絡協議会について

(1) 第1回（令和5年7月12日実施）

尾北地区の主管校である本校と重点校である犬山高校、古知野高校、岩倉総合高校、尾北高校、小牧工科高校の6校で開催した。各校の研究計画の発表と現在の取組状況の報告をし、生徒に貸与されるタブレット端末の使用ルールなどについて情報交換を行った。

(2) 第2回（令和5年12月8日実施）

本校の取組報告、重点校からの報告、情報交換を行った。生徒用タブレット端末のバッテリー切れへの対応、ICT活用の進捗状況や全職員に活用を広める方策について情報を共有した。

3 授業研究推進委員会について

管理職及び教科主任、あいちラーニング推進事業担当者を授業研究推進委員会のメンバーとし、14回の委員会を開催した。全職員へ周知を図るため、委員会の内容を教科会で共有してもらい、意見集約をして委員会に持ち寄る形式で進めた。あいちラーニング推進事業の概要説明をはじめ、本年度の研究計画の周知や、ICTを活用した授業に関する情報交換、先進校への視察結果の情報共有などを行った。また、プロジェクターの教室設置について議論した。その結果、2学期から3年生フロアにプロジェクターを常設した。

4 あいちラーニング推進事業における授業参観及び研究協議（7月11日）について

指導・助言者である日本福祉大学国際福祉開発学部 米津 明彦教授をお招きし、令和5年7月11日に授業参観及び研究協議を実施した。ICTの活用について、「学校全体の業務に対して活用する、教科の指導と評価において活用する、生徒・教員の変化を把握する」等、示唆に富んだご助言をいただいた。

5 公開授業及び研究協議会について

令和5年10月24日に尾張地区の高等学校を対象とした公開授業および研究協議会を開催した。17校42名の参加であった。当日は、日本福祉大学国際福祉開発学部 米津 明彦 教授 愛知県教育委員会高等学校教育課 渡辺 純 指導主事、愛知県総合教育センター研究部教科研究室 三浦 千加子研究指導主事、渡邊 芳隆研究指導主事、同センター研修部企画研修室 久保 優一 研究指導主事、基本研修室 服部 浩子研究指導主事、小牧南高等学校 早川 智代教頭を指導・助言者としてお迎えした。公開授業の後、全体会、各教科に分かれての分科会を実施した。日程は以下のとおりである。

<日 程>

12:45～13:50	公開授業 4限				
	○論理国語	2年7組	教諭	草野	真理子
	○公共	2年2組	教諭	川村	拓也
	○英語コミュニケーションⅡ	2年1組	教諭	出口	枝里
14:00～15:05	公開授業 5限				
	○数学A	1年8組	教諭	浦上	峻平
	○化学基礎	2年6組	教諭	由利	春樹
	○保健	2年2組	教諭	田内	貴久
	○家庭基礎	1年5組	教諭	佐藤	裕子
15:20～15:50	研究協議会・全体会				
	・校長挨拶				
	・公開授業者への指導・助言及び研究テーマに係る講話			米津	明彦様
16:00～16:35	研究協議会・分科会				
	・授業者より				
	・質疑応答・協議				
	・指導・助言				
	(国語)三浦 千加子様、(公民)渡邊 芳隆様、(数学)渡辺 純様				
	(理科)久保 優一様、(保健体育)早川 智代様、(英語)米津 明彦様				
	(家庭)服部 浩子様				

当日実施した公開授業の取組、成果、課題を紹介する。

○第2学年 国語科 草野 真理子

(1) 取組

評論文『未来世代への責任』を読み、本文中の「倫理」「京都議定書の批准をめぐる混乱」という言葉を足掛かりとして、今日的な問題に対する自分の意見を深めよう、という単元であった。本時は本教材を用いた「まとめ」の時間であり「人間、社会、自然などについて、文章の内容等を多様な観点や異なる価値観と結びつけ、新たな観点から自分の考えを深める力を身に付けさせること」を目標とした。「倫理」「利己心」「共有地の悲劇」「経済学者の論理」というキーワードに即して、経済学という学問の考え方の基礎から「環境問題の解決」「未来世代の問題の解決」に至る論理展開を理解させ、本文全体を通しての筆者の考え、さらにそれに対する自分の意見をまとめさせるという学習活動を行った。グループに分かれ、生徒はテーマ別にそれぞれが情報を調べ、分かったことをグループで発表し合い、ワークシートを活用しながら情報を共有した。その後「未来世代への責任」という題で、各自の意見を文章に書き上げ、ロイロノートに提出した。その後、クラス全体で意見を共有し、一人ひとりの考えを深めた。



(2) 成果

テーマ別にそれぞれが情報を調べた上で、グループで情報を共有することが「自分の発見や驚きの共有」につながり、新しい視点・新たな興味へと発展し、再度、情報を調べて情報を共有し合い、意見交換をするという姿が見られた。生徒の「授業の振り返りシート」には「自分とは異なる視点の意見にも根拠があり、なるほどと思った。」「他者の意見や視点が共有できて、自分の考えが深まって良かった。」「現状を知って、授業で読んだ評論文の内容にさらに興味を持った」等の記述が多く、「人間、社会、自然などについて、文章の内容等を多様な観点や異なる価値観と結びつけ、新たな観点から自分の考えを深める力を身に付けさせる」という本時の目標は、おおむね達成できた。

(3) 課題

国語の授業では、文章と向き合うことが多いため、紙媒体を用いた授業を望む声が聞かれる。ICT機器、紙媒体とそれぞれの良さを生かした授業展開が必要であると感じた。

○第2学年 地歴公民科 川村 拓也

(1) 取組

単元は「選挙制度とその課題について」であった。ロイロノートを使用し、選挙制度の実態とその問題点について、生徒間で考えさせる授業を展開した。本時では、生徒自身が模擬選挙や授業の内容を通じて、日本の投票率の問題点について考え、自身が政治参加する際の判断基準を考えるきっかけを作ることを目標とした。



選挙のイメージを現実的なものとし実際の選挙との関連性をもたせるため、模擬選挙を行った。プリントを使用して、選挙に関する教科書の知識の部分について説明を行った。模擬選挙と教科書の知識の部分を活用して、「日本の投票率が低い理由はなぜだろう?」ということ考えた。「もしも、この学校の校長先生が、クラスの選挙でまったら…」というテーマで模擬選挙を実施し、4名の候補者にそれぞれマニフェストをつ

け、その中から1名を選んだ。その後、なぜ自分がその候補者を選んだのかについて、個人で考えた後、4人グループで1名ずつ発表した。最後に、ロイロノートのアンケート機能を利用して、実際に投票を行った。この際の注意事項として、相手の意見を批判しないことと、直感的に選ぶのではなく、自身がどのような理論と根拠をもって立候補者を選ぶのかについて、生徒間で意見交換を行った。教員からは、「実際の選挙でも、どの候補者に対しても賛成できる点と反対の点がある。その中から自分の考えで一番ふさわしい人を選ぶ」ということを伝えた。その後、模擬選挙と教科書の知識を活用して、ペアで「日本の投票率が高くない理由はなぜだろう？」ということについて考えさせた。

(2) 成果

生徒ごとに問題点をあげ、自発的にインターネットを使用して調べたり、周囲の生徒と相談して意見をまとめたりしている姿が多く見られた。生徒の意見としては、「自分が選挙に行っても変わらない」・「投票所まで行く気にならない」・「自分の考えに近い人がいない」などの意見が多くあった。ねらいの達成度として、生徒の授業中における様子や、ロイロノートでの提出状況から、「選挙に行かない理由」について様々な視点から書けている生徒が多くいたので、本時の目標は概ね達成できたと考えている。

(3) 課題

課題としては、実際の選挙の際にどのような判断基準を持つのかは不明である。例えば「2021年の衆議院選挙の候補者から一人選ばせ、その人物のマニフェストを調べ、自分なりに意見形成をしよう」というテーマでのレポートを作成させるなど、何らかの形で生徒への問いかけを行う必要がある。今回、判断基準を考えるきっかけになったので、将来の選挙に対する行動にいかにつなげていくかが課題となる。

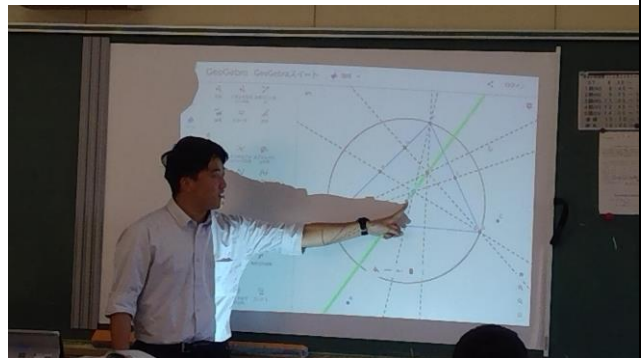
評価についても、基本的にほとんどの小単元と授業において、生徒の意見を問う発問を行い、その意見をロイロノートの提出箱機能を使用して、過去に自分がどの発問に対してどのような意見を書いたのかを確認できるようにしている。これにより、振り返りを行い、さらに自身の興味のある内容についての調査を行うことができる。今後もより良い評価のあり方の研究をすすめていきたい。

○第1学年 数学科 浦上 峻平

(1) 取組

1年生の数学Aにて協同的な学びをテーマに授業を展開した。単元は図形の性質で、その中のオイラー線の証明を取り扱った。本時のねらいはオイラー線の図示や証明をすることで、既習の定理や図形の性質についての理解を深め、その有用性を認識させることである。

そのため、オイラー線の作図やその証明を、GeoGebraを用いて行った。これはインターネット上のアプリケーションで、幾何的な作図をスムーズにすることができ、画面の上で作成した図を動かすことができる。オイラー線は「三角形の重心、外心、垂心が一直線上に並ぶ線」であり、円に内接したどのような三角形に対しても成り立つ。その性質の様子を、GeoGebraを用いて表現した。



(2) 成果

板書で表すには難しい表現を可能とするので、生徒からの反応は良かった。授業後の生徒に対するアンケートでは、GeoGebraを用いて作図をする過程をプロジェクターで投影することで、「学習の理解が進んだ」、「グラフのイメージがよくなった」と回答した生徒が半数以上いた、これからもGeoGebraを適宜取り入れていきたい。また、これには多くの機能が備わっており、ご参観いただいた多くの先生方から機能面でのアドバイスをいただいた。今後の活動の中でも、それらの機能を活用していきたい。

(3) 課題

課題としては、ICT 機器の使用方法について生徒がまだ不慣れな部分があったため、スムーズな演習を行うことができなかったことが挙げられる。日頃から生徒がこうしたツールに触れる機会を作っておくべきであると感じた。また、GeoGebra を用いることで、作図した三角形を任意の形に変形することができたが、さらに授業の内容を発展させる工夫をして、生徒の興味関心を引き出すことで授業内容に深みを持たせていきたい。

○第2学年 理科 由利 春樹

(1) 取組

化学基礎では、第2学年を対象に、「酸・塩基とその反応」の単元の中の、中和滴定の実験を行った。ロイロノートおよび pH メーターを使用した。本時は、「酸・塩基とその反応」の中の「中和滴定」に位置づけられており、「中和滴定の実験を通して、それぞれの操作がどのような意味を持っているのかを理解し、実験結果に対してどのような影響があるかを考察できる。」ことをねらいとした。「実験の操作手順の確認と演示」では、操作手順の説明を兼ねた演示実験において、pH メーターを活用した。



「中和滴定の実施（生徒実験）」では、ジグソー法の手法を取り入れ、中和滴定の実験で用いる3つの器具について、操作方法の習得を図った。前時に、グループの中で担当を決め、同じ器具を担当する生徒同士で操作の練習を行わせ、実験時には、グループ内で操作方法を教えあわせた。「結果の共有と考察」では、ロイロノートを活用して実験結果の記録・共有を行い、グループでの活動が円滑に行われるように工夫した。

(2) 成果

視覚的なアプローチや対話的な活動の実践などによって、実験操作の習得と操作の意味の理解を図ることができた。また、ロイロノートを活用した実験結果の共有によって、様々な視点での考察が可能になり、深い学びの実現にも寄与することができた。

pH メーターを用いると、実験時の pH の変化をリアルタイムで可視化することができた。生徒提出の実験レポートにおいては、実験結果を pH の変化と関連付けて考察している記述がみられ、「指示薬の色が変化するという視覚情報と「pH が急激に変化する」という知識を関連付けて理解させることができた。各実験操作の習得も円滑に行われ、実験自体も余裕をもって取り組むことができた。ロイロノートの活用については、他のグループの結果も共有されるため、実験操作によって生じる誤差の要因について考察する際の材料となった。

また、写真での記録も残るため、実験に関わる理論を十分に理解した後で、再度結果を振り返ることができるなど、深い学びの実現につなげることも可能である。本時のねらいについては、実験レポートの記述や生徒の様子などから、概ね達成できたと考える。

(3) 課題

ロイロノートの活用にあたっては、化学室のような特別教室におけるネットワーク環境が不十分であることなどから、タブレットの使用台数に制限を加えざるを得ないという課題がある。また、pH メーターを用いた pH の変化の可視化については、生徒実験の前と後のどちらかで演示するのが適切であるかという点で課題が残っている。中和滴定曲線の学習との関連も踏まえながら、授業のねらいに合わせて適宜判断していく必要があると考える。

○第2学年 保健体育科 田内 貴久

(1) 取組

2年生の「科目 保健」の「働く人の健康の保持増進」という授業で公開授業を行った。この単元で公開授業を行った理由は、生徒がなかなか授業内容をイメージすることが難しい単元であること、働く上で生じる健康問題についての個人的な解決方法についてはある程度理解はしているが、それを深化させるための活動を取り入れたいということ、こうした健康問題に対しての社会的な取組について、生徒はほとんど知らないと考えられることなどからである。生徒にとって、高校卒業後に次のステージを経て社会人として働く上で健康な生活を送ることができるようにさせたいという思いがあり、この単元で授業を行った。



導入段階で今後の社会について2025年問題やSociety5.0について取り上げ、目まぐるしく社会が変化していく中で、労働についても変化があるということを理解させた。授業の後半で三つの活動を行った。まず、個人で一つ健康問題を取り上げてまとめる。その後グループで発表する活動では調べ学習の時間を10分間と制限し、時間内で取り上げたテーマの課題解決に向けて調べた。その後、個人が調べた健康問題についてグループに発表する活動ではそれぞれがグループに向けて発表を行った。グループにおいて発表順を指定し、取り上げたテーマや症状、個人で取り組むことのできる解決策について一人ずつ発表した。そうして、グループ発表で取り上げた健康問題の中から三つを取り上げ、会社として健康プランや健康サポートを考える活動を行った。

導入段階で今後の社会について2025年問題やSociety5.0について取り上げ、目まぐるしく社会が変化していく中で、労働についても変化があるということを理解させた。授業の後半で三つの活動を行った。まず、個人で一つ健康問題を取り上げてまとめる。その後グループで発表する活動では調べ学習の時間を10分間と制限し、時間内で取り上げたテーマの課題解決に向けて調べた。その後、個人が調べた健康問題についてグループに発表する活動ではそれぞれがグループに向けて発表を行った。グループにおいて発表順を指定し、取り上げたテーマや症状、個人で取り組むことのできる解決策について一人ずつ発表した。そうして、グループ発表で取り上げた健康問題の中から三つを取り上げ、会社として健康プランや健康サポートを考える活動を行った。

(2) 成果

達成度および成果で、机間指導を行い感じた印象では、自分が設定したテーマに向け、グループの仲間に発表することができるように調べてまとめることができていた。仲間の発表についてしっかりと耳を傾け、メモをとりながら発表を聞いていた。

授業後ワークシートを回収し評価を行った。ほとんどの生徒が「自分ごと」として課題に積極的に取り組んでいた。グループ発表で取り上げた健康問題の中から三つを取り上げ、会社として健康プランや健康サポートを考えるところでは、なかなかイメージができなかった。そこでヒントとして、インターネットで企業の福利厚生や健康サポートを検索し、それを例に自分たちの会社での対策を考えなさいと指示を出した。ヒントを与えると各人が企業名を出して検索し仲間に「こういう取組があるよ」と話しながら各グループの健康プラン・健康サポートを考える活動が活発に行われていた。

(3) 課題

タブレット使用した調べ学習や発表活動を取り入れると、時間が足りなくなるなどの問題がある。今回は調べ学習で発表は次回にするなどの対応が必要だと感じた。タブレットを使用すること自体が授業の目的になってしまうように感じた。使いどころや時間を細かく決めて活動を行わせることが必要だと感じた。

○第1学年 家庭科 佐藤 裕子

(1) 取組

1年生を対象に家庭基礎の授業でロイロノートとパワーポイントを使用した。単元は住生活である。住居分野は時代の移り変わりの影響を強く受けているため、学ぶ内容の変化が激しい分野である。単位数が少ないため住生活にかけられる時間数は多くない。



本校は 65 分授業であるため、配当時間は2コマである。1 コマめはオーソドックスな内容を扱った。本時に当たる2 コマめは「これからの住まい」というテーマで、シェアハウスやコレクティブハウスなどの新しい集合住宅や環境共生住宅について学ばせたのち、2023 年3月の愛知教育大学の入試問題が住居分野だったため、これに取り組ませた。具体的には、シェアハウスやコレクティブハウスは実例を取り上げ、環境共生住宅はパワーポイントで写真を見せながら学習させた。その後、実験集合住宅における新たな住まい方という入試問題にグループワークで取り組ませた。ロイロノートの共有ノートを用いてそれぞれが考える住まい方を提案し、他者の意見を参考にしながらより良い住まい方について考察させた。

(2) 成果

発表を通して自分の考えを伝えたり、他者の考えを知ったりすることで学びを深めることができた。集合住宅の新たな試みを理解する、環境に配慮した住まいづくりを知る、グループワークを通して入試問題を解き「これからの住まい」を考察し発表する、という本時の目標はおおむね達成できた。

(3) 課題

しかしながら、授業時間の制約もあり深い考察には至らないグループもあった。思考を深めるにあたり知識は不可欠である。生徒に知識を習得させる時間も、思考を深めさせる時間とともに重要であり、知識なくして深い考察はあり得ない。授業時間のバランスをいかにとるか、とともにグループワークにおける教職員の適切な介入も必要だと感じた。

○第2学年 英語科 出口 枝里

(1) 取組

本時は、英語コミュニケーションⅡで、単元の話が四つに分かれている中の三つ目の話についての授業である。初見の英文を聞いたり読んだりしながら、様々な設問を解いていく中で内容把握・内容理解を図った。その際にペアで話し合わせ、不明瞭な点を生徒自身が考えて解決していこうとすることが目標であった。



展開は3つにわけた。内容把握・内容理解の際には、生徒の手元にペアで1つのタブレットを用意し、生徒に配布したプリントと同じものをロイロノートの画面共有を使用し、画面上に映し出した。これにより、全員が同じ距離感でノートをとることができるようになった。机間指導をする中で生徒が躓いている点や、教員が生徒に把握させたいポイント等は、教員が解説をする前に一度生徒に問いを投げかけることを意識した。生徒にペアで問いについて話し合い考えさせた。教員は生徒の話し合う内容を聞いて、生徒の理解度を図ることができた。また、生徒は解説を聞く前に一度自分自身で考えることで、より主体的に授業に取り組むことができた。

(2) 成果

本時のねらいに関しては、生徒の授業への取組状況やペア活動の様子から、主体的に課題を解決しようとしているとみられるため、ある程度達成できたと考えられる。

(3) 課題

課題としては、ペア活動などの際、英語に対するモチベーションの低さや学力不足から、主体的に学習に取り組めない生徒がいることだ。教員の支援を工夫したり、生徒自身が成長を実感できる機会をつくり、生徒の主体性を育むような支援が必要だと感じた。

6 研究成果について

成果としては、この2年間でICTの活用が大きく進んだ点である。本校では、学習支援ツールとして主にロイロノートを活用することとした。しかし、当初はロイロノートを使用していた教員はわずかであったため、朝の職員打合せに活用するなど、「まずは使ってみる」ところからスタートした。その結果、ロイロノートについては、全職員が使用できるようになっ

た。これと並行してＩＣＴ活用に先進的に取り組んでいる学校への授業参観や各種の研修会に積極的に参加し、そこで得た取組を校内で共有した。また、校内の授業参観においてＩＣＴ活用を進めている教員の授業を参観することで、「これならば自分でもできる」、「自分もやってみよう」という雰囲気が生まれ、授業に取り入れる教員が増えていった。

二つ目の成果が、生徒の主体的活動の時間が増えたことである。ＩＣＴを活用することによって、プリントの配布や板書の時間、生徒がノートをとる時間などが大幅に削減できる。これにより生徒が調べる、考える、まとめる、話し合うなど、生徒主体の活動を増やすことができた。

三つ目の成果が、ペア活動やグループ活動の充実である。これまでは、クラス全体の中から指名された一人が答える、という授業が多くあった。これでは、指名されなかった生徒は何も考えずに正解を書くだけで終わり、ということもあり得る状況であった。これに対して４人程度の少人数グループでの活動や、ペア活動では、全ての生徒が「当事者」となり、教員の働きかけに対して「自分事」として授業に参加することができるようになった。

7 今後の課題について

ＩＣＴの更なる活用法の研究と実践が必要である。多くの教員が授業にＩＣＴを活用するようになったが、プロジェクターで映す、課題をタブレット端末で提出させるだけの教員がいる一方、授業中にタブレット端末で生徒と双方向でやりとりを繰り返す授業を行う教員もいる。教員によってＩＣＴ活用に差がある点が課題である。あいちラーニング推進事業は２年間の取組であるが、授業改善は今後も続けていく必要がある。この２年間で取り組んできた、ＩＣＴ活用に関する知見の共有や活用法の研究を進め、各教員が「できること」を増やすことで、いっそうのＩＣＴ活用を目指していきたい。

ＩＣＴを活用して他の生徒の意見を共有したり、グループ活動などで自分とは違った意見を聞いたりすることは大事なことである。しかしそこで終わるのではなく、生徒が他者の意見を受けてさらに自分の考えを深め、自分の言葉で表現していくことがより重要となる。いかにすれば「より深い学び」につなげることができるかが、もう一つの課題である。そのために教員が生徒に「どのような働きかけをしていくか」「どのような仕掛けを準備するか」、この点を今後も追究していきたい。